

[成果情報名]リンドウ異常開花茎の発生を軽減する間引き法

[要約]「おかやまオリジナルリンドウ早生F₁」系統の3年生株では、株の中心部のシュートを間引き、外側のシュートを残すと、極端に開花が早く、草丈が短く、草姿がほうき状になる異常開花茎の発生を抑制できる。

[キーワード]リンドウ、早期開花、間引き

[研究所名]岡山農研・農研・高冷地研究室、野菜・花研究室

[代表連絡先]電話 0867-66-2043（高冷地研究室）

[区分]近畿中国四国農業・花き

[分類]技術・普及

[背景・ねらい]

岡山県の低標高地域のリンドウ産地では、早生系統を中心に、極端に開花が早く、草丈が短く、草姿がほうき状になる異常開花茎が多発し問題となっている。そこで、異常開花茎となりやすいシュートの特徴を明らかにするとともに、対処方法を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. リンドウの株は、主塊茎部分と副塊茎部分から構成され、塊茎毎にシュートが群生している。各塊茎のシュートは中心から時計回りに1/4芽序を示し、内側の芽ほど新しい（図1）。
2. 「おかやまオリジナルリンドウ早生F₁」系統の3年生株では、主塊茎の中心部のシュート（Ⅰ～Ⅲ）では未発蕾茎、外側（Ⅵ以降）では正常茎、その中間部（Ⅳ～Ⅴ）では異常開花茎が多い（図1、図2）。
3. 副塊茎でも、中心（Ⅰ'～Ⅲ'）では未発蕾茎、外側（Ⅳ'～Ⅵ'）では正常茎が多い（図1、図2）。
4. 塊茎を上から見て、株ごとに群生しているシュートの外側を残し、中心部のシュートを間引くと、異常開花茎の発生が減少する（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 異常開花茎の発生は品種間差があり、発生の少ない品種では実施する必要はない。
2. シュートの発生が多く、間引きが必要な定植3年目以降の株で適用する。
3. 間引きは、草丈30cm頃までに行い、1株7～8本程度とする。

[具体的データ]

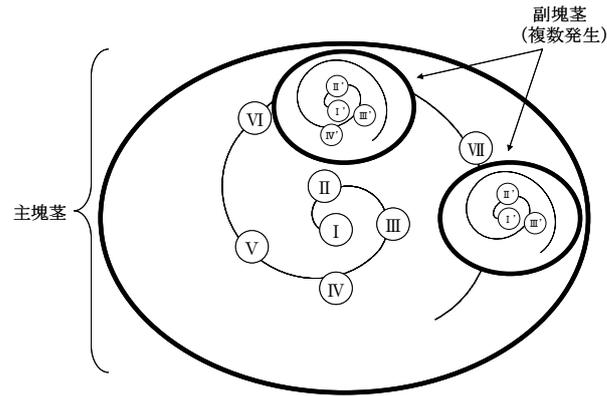


図1 リンドウ塊茎中のシュート発生位置決定方法
注) 塊茎を上から見て、中心芽から I、II、III...とした

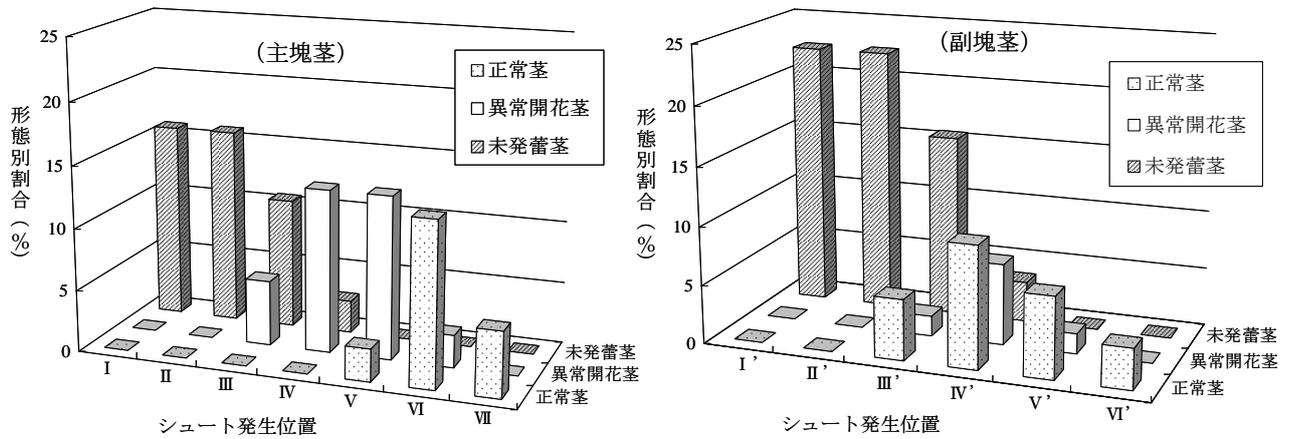


図2 シュートの発生位置と全シュート数に対する形態別シュート数の割合

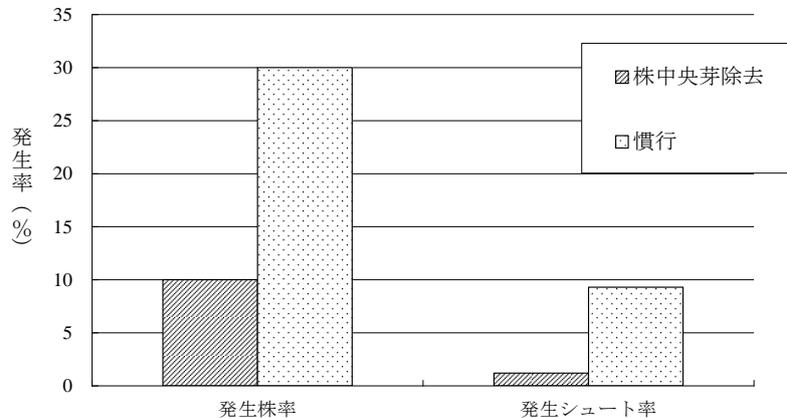


図3 間引き方法が異常開花茎発生に及ぼす影響
注) 株中央芽除去は、株中央部の芽を除去した。
慣行は、中庸な芽を残し間引きを行った。

(藤本拓郎、中島 拓)

[その他]

研究課題名：オリジナルリンドウの連続出荷と新作型の開発

予算区分：県単

研究期間：2007～2011 年度

研究担当者：藤本拓郎、中島拓

発表論文等：中島ら (2011) 近中四農研、18：49-54